

絶対に忘れない

岡山県
真備東剣友会
中学1年 諏訪 孝太郎

二〇一八年七月七日。

それは突然の出来事だった。甚大な被害を与え、僕の家も大好きな真備町の風景も一瞬にして奪い去った。そして、人々は悲しみ、嘆き、今までにない不安や恐怖に押しつぶされた。現実を受け入れるには時間が必要だった。

あの日、警察官の呼びかけにより、僕と母と弟は近くの岡田小学校に避難していた。剣道の仲間も数名避難してきていて、お互いの無事を確認することができ、少し安心した。しかし、岡田小学校の校舎の三階から見た景色に僕はしばらく言葉を失った。真備の町は茶色の海と化し、今まで僕たちが剣道の稽古をしていた真備東中学校の体育館は一階部分が完全に水没した状態だった。もう剣道ができないという思い。思い出の場所がなくなった悔しさ。心のよりどころがなくなった寂しさ。先への不安。いろんな思いがこみあげてきて、涙があふれて止まらなかった。

この日を境に僕の生活は大きく変化した。住む家を失った僕たち家族は、避難所で数日間過ごした後、父の単身ふ任先の新見市に身を寄せることになった。僕は、新見市という知らない町で、友達も環境も変わること大きな不安を抱えていた。両親は朝から晩まで被災した家の片付けのために、新見市と真備町を往復する毎日。両親のいない間、留守番をしている僕は、剣道具も勉強道具もすべて水没し、毎日がただ過ぎていく。何をするにもやる気が起きない。次第に両親との会話も減っていった。そんな僕の思いを察した母が、真備東剣友会の先生に相談したところ、先生の知り合いが新見市で剣道の先生をしていることが分かり、連絡をとってくれた。それが新見市にある本郷剣道スポーツ少年団だった。

あの日から一カ月余りが過ぎた八月ごろ、僕は、剣道を通じた様々な支援により、何とか剣道具と剣道着を手に入れることができた。そして、本郷剣道スポーツ少年団の稽古に初めて参加した。とにかく何もかもが不安だった。うつむいていると、指導してくださる先生が、

「剣道は剣道具と剣道着さえあればどこでも稽古はできる。真備の家がなおるまでは、うちと一緒に頑張ろう。」

と言って僕を励ましてくれた。何もかも失い、一度はやめようと思っていた剣道。先生の言葉は僕の心にじんわりと響いた。本当にうれしかった。

被災してから全く運動していなかったため体は重かったが、再び剣道ができる環境を見付けることができた。母も勤務先が遠くなったにも関わらず、疲れた顔一つせず、送迎してくれた。ある日、先生に、

「試合に出てみないか。」

と言われ、僕は迷わず、

「はい。」

と答えた。なぜなら、今は剣道ができるだけで本当に幸せだから。そして一緒に目標に向かって頑張るかけがえのない仲間に出会うことができたから。

あの日から一年以上過ぎた。僕は、真備町に戻り、今までと同じように日常生活を送っている。被災前は、剣道ができるのが当たり前だった。しかし、それは違う。周りにはいつも助けてくれる家族、仲間、先生がいて、自分は一人で生きているわけではない。当たり前だと思っていることが毎日当たり前ができるというのは、実は当たり前ではない。いつ、今までの生活ができなくなるか分からない。剣道を通じて、人の縁の大切さを学び、そして未来へ向かって歩き出す力を与えてもらった。だから僕は、今まで以上に、一日一日を大切に、周りに支えてくれる人がいることに感謝しながら生きたい。

支えて下さった皆さん、本当にありがとうございました。